

## 廃プラ焼却炉が撤退に！

### 住民の反対運動と議会での追及で

追分町に旭物産が設置しようとしていた廃プラスチック焼却炉（養魚場の温水を作るための「ボイラー」と称していた）が、計画を撤回して取り壊すこととなりました。4月に計画が明らかになって以来、追分町自治会をはじめとした地元住民の反対運動がすすめられ、また6月市議会でも大問題となったことを受けて、業者側も操業はムリとあきらめたようです。

### 養魚場は「偽装」、焼却が目的だと明らかに

6月15日の市議会本会議で、私はこの「養魚場」計画は、全く採算の見通しがないこと、最初から同一敷地の産廃処理会社「北勢クリーン」の作る廃プラを燃やすことが前提であることから、焼却炉をボイラーだと「偽装」したもので認めてはならない。また鈴鹿市は、市民にプラスチックゴミを分別して出させ、それを燃やさずに固めて埋立て処分しているが、その日量約10トンを上回る15トン以上もの廃プラの焼却を許せば、鈴鹿市のゴミ行政は成り立たなくなる、と市県の行政がきびしく対処することを求めました。川岸市長も、傍聴席を埋めた住民の前で、地元と連携して指導していくとの姿勢を表明しました。杉本議員、森田議員も同様の質問をおこないました。

その後22日の生活産業委員会で、住民から出された焼却炉反対の請願が審議されましたが、その席上で市当局は、19日に業者の代表が市役所へ来て、養魚事業はやめること、ボイラーも撤去するとの意向を口頭で表明したと報告しました。今後きちんと書面で県市に手続きを行なうまでは、安心はできませんが、住民の懸命の反対運動が業者を撤退に追い込んだと言うことができます。今後は、別の場所でも同様の産廃施設ができないような、きびしい行政チェックの体制整備が求められます。

# 鈴鹿の加佐登ダムの水、亀山のシャープに取らせるな

6月議会に出された「三重用水の水を供用対象外の亀山市に供給することに反対する請願」が、27日の本会議で全会一致で採択され、市議会として県に意見書を提出することとなりました。

三重県当局は、亀山市へのシャープ工場誘致のさい、90億円もの補助金とともに工業用水の供給も約束していますが、第1期では亀山市が6千トンの供給に応じました。今工事中の2期工事では県企業庁が水を供給することになりますが、県はその水を三重用水の加佐登ダムから持っていくと、地元の鈴鹿市に何の相談もなく突然決めたことが、大問題になっています。

## 渇水時にはカラになるダム、農業の死活問題に

加佐登ダムの水は下流の鈴鹿用水の補給水として、鈴鹿の農業に欠かせない水源になっています。今は満々と水をたたえています。干ばつの時などは底が見えるほどのカラ状態になることもあります。市は三重用水事業の負担金として、農業予算から毎年3億円もの「水代」を払い続けてきました。

加佐登ダムには、工業用水の水利権も県がもっていますが、それは「鈴鹿の工業用水」との計画によるもので、よそに持って行くためのものではありません。あたかも水は自分の自由になるかのような県の姿勢には、市当局も議会も一致して反対を表明しています。

シャープへの水供給は、誘致時からの県の約束であり、今年になって急にわいた話ではありません。県の場合当たりの対応と、「シャープありき」の姿勢が、これからきびしく問われます。

---

## 幼稚園の「休園」基準、引き下げに

さる3月に、市教委は園児の減っている市立幼稚園を、「15人」未満の場合は「休園」にすると表明しました。私をはじめ議会では「周辺部の切り捨て」だとの意見が出ました。また地域からも同様の意見が出されました。

このほど市教委は、この休園基準を見直して、来年度の募集に当たっては、「10人程度」と柔軟に行なうとし、機械的に周辺部を切り捨てるような姿勢を改めました。

# 来年から市県民税率が一律10%に

小泉構造改革の税制版として、年金控除や老年者控除がへらされ、定率減税が廃止されて、今年はグンと増税に、それも生活に余裕のない階層に重い増税になっています。今年の市県民税が通知された6月上旬から、市民税課には連日問合せや抗議が殺到しているとのこと。

さらに来年からは国と地方の「財源委譲」として、所得税率をへらして地方税率を増やすという措置が、3兆円規模で行なわれます。具体的には、いま税率が5、10、13%の3段階から一律10%とされます。政府は所得税と地方税の合計は変わらないので、納税者に影響はないと説明していますが、実際はどんどん改悪された所得税を、そのまま地方税に移すので、市民の重税感はますますつのることになります。

これが「地方のため」と言う理屈はウソです。税源委譲3兆円と同時に補助金1.3兆円、地方交付税1.3兆円もの削減がされ、地方の財政危機はさらにひどくなるのです。政府は地方から引き上げた金を、米軍基地移転の負担3兆円などに回そうとしています。許せないことです。

---

## 神戸中・平田野中の移転改築は、PFI方式にしないことに決定

公共施設の建設・運営を、民間業者ゼネコンに一括してまかせる「PFI」方式を、神戸中・平田野中の改築に適用するかどうかを検討してきた市教委は、このほど調査の結果、PFI方式にはせず従来どおりの建設事業とすることにしました。PFIにしても事業費が3%ほどしか低くない、それなら工事の入札で3%以上安く発注すれば良いからです。

共産党市議団は、PFIには問題が多いと反対してきましたが、その指摘どおりになりました。この余分な調査のために、建設時期が2年ほど遅れたこと、ムダな費用がかかったことも問題です。

## 不燃物処理場2期事業はPFIで検討すすめる

一方、不燃物リサイクルセンター・最終処分場の第2期事業については、PFIにすれば13%ほど安くできるとの調査結果が出て、今後PFIでの検討を進めていくとしています。

## 生活にあふれる食品添加物

食品添加物に浸りきった私たちの生活を告発した話題の書「食品の裏側」（安部司著）は、「食品添加物の神様」と言われるほどその普及に尽くしてきた、その本人が書いたものだから、非常にリアルである。これを読むと、ほとんどの食品にはびっくりするほど大量の添加物が入っていて、私たちは毎日20～30種以上の添加物を、食材とともに食べていることが分かる。

### 裏の表示を見る まずは手首の練習から

例えば、コーヒーに入れるフレッシュの成分は、「水と油と白い粉（乳化剤など）」で、牛乳もクリームも使われていない。醤油にも本物の「丸大豆しょうゆ」ではない、大豆の絞りかすを塩酸で分解して作ったアミノ酸液に色・味・かおりを付けた「新式醸造しょうゆ」がある。というように、あらゆる食品が人工的に作られた味になっていて、消費者をだましている。

これに対抗する方法は、まめに包装紙の裏側を見て、「原材料」に使われているものを確認することである。むつかしいカタカナの物質名など覚えなくても、要するに「台所にないもの」があまり入っていない品を選ぶようにすれば良い。「賞味期限」はよく見るが、添加物は見ないというのでは、わが身は守れない。安いもの、いやに新鮮に見えるもの、一見おいしそうなものは、まず疑ってかかる必要がある。

以前にある茶農家を訪ねた時のこと、ご主人が2種類のお茶を出して、飲み比べるように言う。一方のお茶は少し味がきつい。真横から見ると表面に透明な膜が張っているようで、「こちらには味の素が混ぜてある」と聞いて驚いた。そう聞かなければ「おいしいね」と飲んでいるはずだ。「こんなことをしていると、お茶がダメになる」とご主人は嘆いていた。

阿部氏も同じように、クズ肉を大量の添加物で固めて作ったミートボールを発明し大ヒットしたが、そのミートボールをわが娘が食べる場面で「食べたらいかん！」と取り上げ、「自分も、自分の家族も消費者だったのだ」と気がついて、翌日会社を辞めた。そして今、世間に食品添加物の実態を知らせる活動をすすめている。彼は「作る人、売る人、食べる人」のつながりを取り戻すために、食品の「裏側」を正しく知ることを呼びかけている。